



# Myメイド

わかつきひかる

illustration ©みやま零

美少女文庫  
FRANCE & SHOIN



## カノジョは貧乏お嬢様!?

私立空色<sup>そらいろ</sup>高校の校門の前の通学路は、三々五々下校していく生徒たちで埋まっていた。まるで紺色<sup>こんしき</sup>の波が移動していくようだ。

佐々木大地<sup>ささき だいち</sup>は人混みのなかで、うーんと伸びをしながら空をあおいだ。

風は冷たいが、すがすがしいほど青い空がひろがっている。桜の花は終わってしまったが、春はいちばんいい季節だ。新しいことがはじまりそうな予感がする。

「きゃっ」

肩が当たり、小さな悲鳴が聞こえた。

反射的にあやまってしまった。

「ごめん」

「よくってよ。私も悪いから。こっちこそごめんなさいね。……あれっ。佐々木くん

だ

勅使河原<sup>てしがわらあゆ</sup>亜由。二年D組の同級生だ。春とはいえ、まだ肌寒い季節なのに、額に汗をにじませて、上気した頬をしている。ほんわかと甘い匂いが漂ってきた。コロナとかではない。彼女自身の体臭だ。

——いい匂いだなあ……。

「勅使河原さん、僕を覚えてるんだ？」

「当然でしょ？ 同じクラスですもん」

新学期がはじまって二週間だから、そろそろクラスメイトの顔を覚える頃ではあるのだが、亜由に覚えてもらえたことが素直にうれしい。

「僕って影薄いだろ。勅使河原さんは目立つけど」

「そんなことないわ」

亜由は花がこぼれるように笑った。周囲がぱつと輝いて見えるほど、華やかな笑顔だ。

春の風が、亜由のツインテールに結った黒髪をさらさら撫でる。長いまつげが整った横顔に影を落とし、驕慢<sup>きょうまん</sup>そうにも見える顔立ちをかわい系の印象に変えていた。

ブレザーにプリーツスカートの同じ制服を着た女子生徒が何人いても、いや、同じ制服だからこそ、彼女の美しさは際立っていた。亜由のまわりにだけ、スポットライ

トが当たっているようだ。

——おい、勅使河原さんだぜ。相変わらず上品だなあ。なんかオーラを感じるよ。

——亜由先輩っていいお家のお嬢様なんですよ？

——うん。町はずれに洋館があるじゃん。あれ、勅使河原さんのお屋敷だって。ご先祖は華族だとか大名だとかって聞いたよ。

——勅使河原さんって、特待生なんだって。成績もよくてスポーツもできるって。

学園のマドンナだよなあ。

——ちょっと気取ってる感じがするけどね。

——まあ、そりゃ、あれだけ綺麗だったらしかなないよ。

ウワサする声が聞こえてきた。

大地は意味もなく、得意な気分になってしまふ。

——そうだよ。僕は学園のアイドルと同じクラスなんだぜー。タメ口で会話できるんだぜー。

「じゃね。急ぐから。またね」

学園のアイドルのお嬢様は、かわいく会釈すると、パタパタと走っていった。

佐々木は、走り去っていく亜由の背中をあこがれの視線で見た。ミニ丈のプリーツスカートからのぞく太腿と、膝小僧の内側のくぼみがあざやかに白い。ツインテール

が勢いよく跳ねて、ブレザーの肩に当たっている。

「へへへーっ」

大地はにまにまと笑いながら、小さな幸運を噛みしめた。



勅使河原亜由は、ファミリールレストランの裏側の従業員入り口で、周囲をこそそこそと見渡した。

——誰もいないわ。今がチャンスよっ。

そうつとドアを開けて身体を滑りこませる。

「お早うございまーすっ」

「勅使河原さん。今日は遅いね」

「すみません。図書館で本をかえしたら、遅くなっちゃって」

運悪く鉢<sup>はち</sup>合わせしてしまった店長にこやかにあいさつしながら、タイムカードを

押す。

「タイムカードは仕事の準備ができてから、って言ってるだろ」

「はーいっ。すみませんっ」

亜由は、かわいく笑い、上目遣いで店長を見てごまかした。

五分後には、もう亜由は、黒のミニワンピースと白いエプロンの、ウェイトレスのコスチュームでお盆を持って店内を歩きまわっている。

「いらっしやいませ」

「お水はいかがですか？」

「こちら本日のおすすめの肉料理でございます」

笑顔を振りまき、接客をする。もう半年近くつづけているので、てきぱきしたものだ。

平日の放課後、三時間から四時間程度バイトをするのが、彼女の毎日の習慣になっていた。

セーラー服の女子高生が、亜由を見つけて声をかけた。この制服は隣町の公立だ。

「うっそーっ。勅使河原さんだよね？」

「あーっ。勅使河原さんだっ！ バイトしてるの？」

——あちゃーっ。

中学のときのクラスメイトが三人、テーブルを囲んでいる。

時間の融通が利く<sup>き</sup>うえに、食事が出るので選んだバイトだが、知り合いに逢うたびに顔がひきつってしまふ。

「ええ。社会見学なの」

「そうなんだあ。立ち仕事だし、バイト代安いからたいへんでしょ?」

「そうかもね。でも、社会体験よ。お金には換えられないわ」

「お嬢様なのにえらいのね」

——なにがお嬢様よつ。お父様のバカッ、いっぱい借金こさえやがってーつ。ご先祖様もご先祖様だわつ。隠し財産や家宝のひとつやふたつ、子孫のために遺しておいてよーつ。私の気持ちになつてみやがれーつ。

亜由は内心で吼えながらも、お嬢様っぽく笑い如才なく応答する。

「だって、ほら、この服、かわいいでしょ。着てみたかったの」

「ほんとね、メイド服みたいでステキよね。勅使河原さんに似合ってるよ」

「でしょでしょ? メイドさんみたいでかわいいよねっ」

——ああ、もう、いっそメイドになつて、住みこみで働きたいぐらいよっ! 電気代つてどうしてこんなに高いのよっ。ったくっ!!

「内緒にしてね。ホントはバイト、ダメなのよ」

亜由はお盆を胸に抱きながら、いたずらっぽく唇に人差し指を立てて見せた。

「空色高校ってバイト禁止だっけ?」

「私って特待生でしょ。品行方正でなきゃいけないの」

「あー。そりゃ、内緒にしなきゃいけないよねー。うん。わかったよ。まかせてっ!!」  
「あ、そうかあ。勅使河原さん。成績、トップだったよね。特待生かあ。当然よねえ」  
——そうよっ！ 私は成績がいいわよっ!! 才色兼備の学園のマドンナよっ。ホン  
ト私ってエライわよっ。こんなに苦労してるっていうのにつ。

内心とは裏腹に、亜由は小首を傾<sup>かし</sup>げて謙遜<sup>けんそん</sup>した。

「やだっ。トップなんて大げさよ」

女の子たちと亜由は、共犯者のように笑い合った。

亜由の背中を、たあらりとイヤな汗が伝う。

——ぜいぜいっ。や、やったわ。これで完璧よっ。『お金持ちなのに、社会見学で  
バイトをしているお嬢様』のフリができたわっ。

勅使河原家は、貧乏だった。

見た目だけ立派な洋館の中身はボロボロで、固定資産税が払えず物納したあげく、  
とうに国の管理物件になっている。観光施設にする計画があったらしいのだが、いわ  
ゆる行政の怠慢で放置状態だ。

親戚はちりぢりで、母は亜由の幼い頃に鬼籍<sup>きせき</sup>に入った。どら息子を絵に描いて額に  
入れたような父親は、パチンコ競馬に明け暮れたあげく、綺麗なお姉さんと駆け落ち  
した。



だが、逆境は、亜由をたくましくした。

成績がよいのは、バイトと家事に明け暮れるなかで、要領よく勉強する方法を身につけたおかげだし、カンがいいからウエイトレスのバイトだってソツなくこなす。粗食は彼女を健康にし、病氣知らずにした。

それに亜由には、金はなくとも、ご先祖から受け継いだ上品さと美しい容姿と頭脳がある。あえて欠点を探すなら、背が低いことと金がないことぐらいだろうか。

——きつと、神様のいたずらね。私が優秀で美しすぎるのが罪なのねっ！ バランスを取るために私を貧乏にしたんだわっ。

だが亜由にはもうひとつ欠点があった。本人が気づいていない欠点である。いや、特徴というべきだろうか。

テーブルの間を、料理を載せたお盆を片手に持って歩いていたとき、胸に違和感を覚えた。

「きゃっ」

悲鳴をあげ、足をとめる。

中年の男性が、にやにやと笑いながら手をひらひらさせた。すれ違いざまに、乳房をさわったらしかった。

「無礼者っ！」

亜由は、お盆に載せてあつたスパゲッティの皿を、テニスの素振りのように、ぶうんと振りまわした。

客の顔に、スパゲッティアラビータがヒットした。できたての、熱いスパゲッティを顔にぶつけられたのだから、中年男にすればたまつたものではない。雑巾ぞうきんを引き裂くような悲鳴をあげる。

「ぎゃーっ！ 熱いつ、あちちちっ」

「あらあー、お客様あーっ、だいじょうぶですか？ お客様が痴漢行為ちかんけいを働いたりなさるものですから、私、手が滑ってしまいました！」

亜由はお盆を胸に抱いたまま、ツンと顎あごをあげた。

たちまち店内が騒然となる。

「な、な、なにを言うんだっ。君はっ。胸のホコリを払ってやっただけじゃないかっ。店長を呼べっ！」

「ホコリは自分で払えますっ！ 無礼なことをしたら許しませんよっ!!」

店長が飛んできた。頭からスパゲッティを垂らし、ワイシャツをアラビータでまだらに赤く染めた客に平身低頭する。

「すみませんっ。ウチの従業員がとんだことを……」

「私は悪くありませんっ！ このお客様、胸をさわったんですっ。痴漢は犯罪ですっ!!」

警察を呼びますよっ。監獄に入って反省なさいっ。最低よっ!!」

泣いて謝罪すればその場は収まったのだろうが、気が強い亜由は大声で怒鳴りまくるだけだ。

「無礼者とはなんだーっ。ウェイトレスのくせしやがっーっ。お前はお姫様かつ!」  
貧乏娘とはいえお姫様はほんとうなので、亜由はいよいよエラソウにふんぞりかえった。

「君はクビだーっ! スパゲッティ代とクリーニング代は君のバイト代から引くからなっ」

「わかりました。失礼しますっ! 店長、残りのバイト代は振り込んでくださいねっ」

「あ、ああ、もちろん……」

亜由はエプロンをはずしながら、振りかえりもせず歩き去っていった。

勅使河原亜由。私立空色高校二年D組。

成績優秀スポーツ万能、学費諸雑費すべて免除の特待生。才色兼備の学園のアイドル。大名華族の末裔<sup>まつえい</sup>で、生まれついてのお嬢様。

彼女は貧乏娘で、しかも気位がおそろしく高かった。

